

# Parent Education Theory と実践 : アメリカ合衆国ペンシルベニア州フィラデルフィア地域の9つの事例（総説）

著者	上野 善子
雑誌名	滋賀医科大学看護学ジャーナル
巻	9
号	1
ページ	13-17
発行年	2011-03-15
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10422/774">http://hdl.handle.net/10422/774</a>

## 総説

## Parent Education Theory と実践

## —アメリカ合衆国ペンシルベニア州フィラデルフィア地域の9つの事例—

上野善子

滋賀医科大学医学部看護学科地域生活看護学講座

## 要旨

本論は Parent Education theory に基づくプログラムの実践の特徴を明らかにするものであり、家族支援システムの一環である Prevention の視点から、ペンシルベニア州フィラデルフィア地域における9つのプログラムの手法と特徴を基に明らかにした。フィラデルフィア地域では、主に貧困地域や若年妊娠などのハイリスク者を対象に、家族支援サービスとしての Parent Education を展開している。子育てに困難を抱える親がプログラムへ参加するための動機づけが重要であり、家庭訪問サービスを実施することで、親がプログラムに参加しやすいよう工夫している。Parent Education の継続過程では、対象者を親から祖父母にまで拡大した家族とし、家族が住んでいる地域の中で教育と支援が受けられるよう充実が図られている。プログラム作成者の評価ポイントは、地域の歴史・社会経済的な特徴と文化的基盤を考慮した上で対象者の範囲を決定することが重要であり、集中的あるいは長期的に、どのような予防活動や介入プログラムを計画して関わるかを明らかにすることであった。

キーワード: Parent Education、Prevention、家庭訪問、家族支援、子育て支援

## はじめに

Parent Education Theory は、所謂「親教育」理論のことであり、1930年代以降、フロイトの議論を始めとして心理社会的領域で活発に議論されるようになった。フロイトやエリクソンなど親子関係に関する古典的心理学理論は初期の親教育として用いられてきたが、近年の欧米各国では認知行動療法など親へのトレーニングによる行動変容の手法が多く使用されている。

アメリカで最もポピュラーな理論は、子育てを継続する際の心の温かさとコントロールについて議論した1959年のシェーフアの理論であるが、その他、1963年のカール・ロジャーズによる humanistic and reflective theory や1969年のピアジェの思考発達段階理論、1978年に子どもの発達と社会的相互関係について述べたヴィゴツキー、1991年にはボウルビィによる Attachment theory、また、最もポピュラーな手法は1970年に発表されたトマス・ゴードンの Parent Effectiveness Training (P.E.T.) であり、全米だけでなく広く世界に展開されていった。

このような歴史的理論的展望から近年の虐待予防まで含めた Parent Education は世界で拡大しており、その他多くの子育て理論や手法も存在するが<sup>1)2)</sup>、詳細は他稿にゆずることとする。

本稿では、アメリカ合衆国ペンシルベニア州の9つの事例から Parent Education の特徴と評価について述べる。

## I Parent Education の位置づけ

## 1 Prevention

Parent Education は、まずは思春期前の子どもたちが親になるための準備期間として Maltreatment の予防教育、つまり Primary Prevention (PP; 第一次予防) として取り組まれているものがある。幼児教育におけるお人形遊びから始まり、小学校低学年の男女への学校を中心とした子育て教育が一般的である。しかし、それぞれのコミュニティでは Secondary Prevention (SP; 第二次予防) として、子育てニーズの高い親や児童へ虐待やネグレクトなどハイリスク群の親へのインターベンションとして使用される場合も多い<sup>3)4)</sup>。

## II アメリカ合衆国ペンシルベニア州フィラデルフィア地域の Parent Education

## 1 Parent Education Program の特徴と目的

SP として展開されているペンシルベニア州の Parent Education プログラムは、子どもへの虐待行為が常習的で、家族内の問題が根の深いケースを抱えているスラム近郊地域や、斜陽にある郊外の地域を中心に提供している<sup>5)</sup>。特に、人種や民族集団などのコミュニティの文化的特徴を基盤とし、効果的なプログラムを作成している。また、乳幼児の世話や人格面での行儀作法を含めた Parenting (親業) がセルフ・ヘルプグループとして込みこまれており、家庭訪問サービスやカウンセリング、親と子どものプレイグループ、

セラピーによる子どもへのケアなど、トレーニングを受けた専門家による家族支援が、あらゆるニーズに基づいたサービスとして多様なプログラムで提供されている。

Parent Education を行う目的は、親が子どもを最適な状態で育てられることである<sup>6)</sup>。最も重要な点は、親子が住み慣れた地域で生活をおくる中で、必要な時に必要な支援が継続的に得られ、家族関係が促進されることを目的とした構想がなされることである<sup>7)</sup>。

## 2 Parent Education プログラムの内容

ペンシルベニア州の Parent Education のサービスを受ける対象者は、共通してサポートの必要性が高く、ハイリスクな家族が中心となっている。従って、プログラムの作成者は、様々なニーズに対応可能なプログラムを作ることを常に試みている。Parent Education は、虐待する可能性が高い親や家庭に問題がある家族が積極的に参加することが目的である。しかし実際は、仮にそういったプログラムを作成し、対象者へ呼び掛けて参加した場合でも、継続的な参加が期待できず途中で離脱してしまい、本来、最もサポートが必要なところにサポートが行き届かないという状況が起こり得る<sup>8)</sup>。Parent Education を継続させるためには、家庭における経済的問題や子育ての心理的ストレスに対する総合的な家族支援が不可欠であり、通常は親にのみ向けられがちな支援も、同時に子どものサポートを含めた支援内容としてプログラムされ、継続されている。

## 3 フィラデルフィア地域における 9 つの Parent Education Program の現状

表 1 は、ペンシルベニア州フィラデルフィア地域で行われている 9 つの Parent Education の例である。

(表では Parent Education を P.E. と記載)

①オルタナティブ (Alternative Family Resources) は、低所得の家族と 10 代の親が対象である。訪問看護協会と協働で家庭訪問を行い、Parent Education と同時に、保健衛生活動を行う。このサービスを受けている親は支援センターまで無料送迎サービスを受けることができるので、移動手段がない親も参加することができ、参加率の向上が図られている。

② APM (Asociación de Puertorriqueños en Marcha, Inc.) は、経済的に貧しい地域社会に住む家族に対して、集中的で、かつ家族単位でサービスが提供される。サービスの特徴は、教師やソーシャル

ワーカー、子どもの発達の専門家などから成る家族保護チームによってプログラムが提供されるため、様々な困難事例にも対応することができる。

③コングレソ (Congreso de Latinos Unidos, Inc.) では、ラテン系の家族に対して、アドラーの心理学を基礎とした親の行動変容のための Parent Education プログラムが提供される。10 週間のワークショップは、それぞれ親が関心のある子育てテーマから行い、モチベーションを向上している。また、クラスの終了後は親たちが交流会を行い、継続的支援が受けやすくなる。特に「KidConnection)」というワークショップでは、子どもの健康についてのサービスを提供している。

④フィラデルフィア犯罪防止協会 (Crime Prevention Association of Philadelphia) はスラム地域が対象である。集中的に、かつ集団を対象とした介入プログラムに力点が置かれている。例えば、モーニング・プログラムは週に 4 回 1 日 4 時間のプログラムで提供され、各セッションも Parent Education とそのサポートが中心となる。親がプログラムに参加する間、子どもたちはケアが提供されるため、小さい子どもを複数抱えた親でも参加できる。

⑤ビュックス郡ファミリーサービス協会 (FSA of Bucks County) は、二つの低所得者層の地域で 3 つのサービスを提供している。ファミリーライフ・エデュケーションでは子どものしつけやお金の管理、子どもとの関係の作り方などの様々なテーマを取り上げ、基礎的な Parent Education が受けられる。また、自宅でカウンセリングを受けることができ、ペアレント・サポートの自助グループが利用できるなど、地域に密着したサービスが提供されている。

⑥FSP (Family Services of Philadelphia) は、フィラデルフィア隣接の子どもへの虐待報告が増加しつつある、7 つのスラム地域を対象としている。「ファミリークラブ」と呼ばれる 6 週間連続のペアレント・エデュケーションのワークショップが提供される。プログラムではペアレンティングに加え、親子でポジティブ・モデルを使うペアレンティング・プレイが含まれている。第二段階では、対象者は両親から祖父母まで拡大される。

⑦FSS (Family Support Services, Inc.) は、フィラデルフィアの低所得地域で、健康問題のある乳幼児を抱えた家族に、センターでの集中的サービスを提供している。家族を入会させる方法のひとつとして、訪

問看護師による家庭訪問を行っている。第二段階になると、プログラムに全回出席する条件で、約1ヵ月間の子育てのレスパイト・サービスが受けられるので、継続したプログラムが受けやすい。

⑧フィラデルフィア・チャイルドサービス協会(Philadelphia Society)は、ハイリスクなスラム地域で活動し、6歳以下の子どもを抱えた親を対象に、個人またはグループ単位の介入を行っている。センターを中心とした親グループのプログラムや気軽に入っておもちゃを借りることができるライブラリーと、家庭訪問を組み合わせている。イリノイ州シカゴの「ベートーベン・プロジェクト」を真似て創られた家庭訪問モデルは、家族支援の専門的な助手を雇用している。親としての心配ごとや親子の接し方についての子育て相談には、隔週毎の家庭訪問で応じる。「ミネソタ初期学習計画モデル」では、家族支援者と地域のボランティアが協働で親のグループを指導している。このモデルは少なくとも2年と長期で継続して関わり、子どもの成長と親子の交流の強化を強調しながら、各週でグループ・ミーティングを行っている自助モデルである。

⑨ユース・サービス(YSI)は10代で妊娠して親になった若者を対象とし、家庭訪問とセンターにおけるParent Educationを行う。母親が妊娠中から家庭訪問が始められ、子どもが2歳になるまで継続して経過を追い、看護師と家族支援の専門助手が定期的に交代で家庭訪問が行われる。週3回センターでのサービスが提供されるが、第二段階ではMother-Baby Movement Therapyというグループに拡大され、子どもの発達にどのような方法が有益であるかについての教育を受けることができる。

#### 4 Parent Education サービスの評価

家族支援研究の専門家であるMcCurdyとJonesは、Preventionプログラムを行う際の5つの視点を挙げている<sup>9)</sup>。

- 1) 虐待リスクの高い両親は、どのような種類(長期的あるいは短期的)のサービスで子育ての仕方を変容することができるかをプログラム作成者が知ること、
- 2) 効果があったのは、プログラムのどのような特徴だったのか、
- 3) 深刻な子育て問題を抱える家族が、積極的に参加できるプログラムの内容はどのようなものであったか、
- 4) プログラム遂行時、困難な状態に直面した場合の対策を支援者が共有できるようにすること、
- 5) ハイリスクの両親が、自ら子育てに挑戦しようと思っ

たキッカケや心の変化に至った経緯を明らかにすること、である。

また、様々な支援サービスを提供される親は、一般的に過去の体験から傷つきやすく、身体的、精神的、社会的に様々な脆弱性をもっている。このような親たちに対して、まずは虐待とネグレクトの予防サービスに参加させる方法と、両親が様々な予防的サービスからempowerする力を引き出す方法については、プログラムの様々な「経験的教育」から評価される<sup>10)</sup>。

これらのSPプログラムは、困難を抱える家族に対する虐待予防サービスの実践的ガイダンスである。しかし、最も重要なことは、まず支援ニーズのある親がプログラムへ参加するための動機付けをすることであり、次に、子育てと言う長期的使命に対し、地域で継続的な支援を得ながら、アウトカムとして家族の自律と自立が実現されることである<sup>11)</sup>。

Parent Educationの方法は地域の社会的文化的民族的特性を基にして行われることが重要であることは既に述べたが、フィラデルフィア地域ではSPプログラムの動機付けの手法として、様々な専門的知識を持った支援者が、ニーズの高い人に対し家庭訪問サービスを提供し、動機付けを行っていることを特徴としている。次いで、家族の自立に向けたParent Education Programの家族支援の内容が評価、フィードバックされる円環システムが適用されていることである。

#### まとめ

ペンシルベニア州の事例から、Parent Educationは地域の特性に適応した方法によって、家族のニーズに沿った予防活動における家族支援として活用されていることが明らかとなった。Parent Educationを行う地域の歴史的社会的民族的背景を考慮した上で、プログラム作成者である専門家が、対象者の範囲や具体的な予防や介入を行う内容について、経験的評価をフィードバックさせながらプログラムすることが必要である。

本論は日本におけるParent Educationの現状は触れていないが、ペンシルベニア州の事例は日本の地域・家族保健や子育て支援の活動として発展することが示唆される。主に民間活動として担われる日本のParent Educationは、とりわけSPとして、両親や祖父母をも含めた地域における家族支援として発展されることを期待して、経緯と意義について別稿で論じたい。

文献

- 1) Mooney, C.G. : Theories of Childhood- An Introduction to Dewey, Montessori, Erikson, Piaget & Vygotsky. Redleaf Press. Minneapolis, 2000.
- 2) Beatty B., Cahan E. D., Grant J. : When Science Encounters the child. 1-34, Teachers Collage Columbia University, New York, 2006.
- 3) Wald M. S., Cohen C. : Preventing Child Abuse - What Will It Take?. Family Law Quarterly 20(2) , 281-302, 1986.
- 4) Daro, D., Jones E., McCurdy, K. : Preventing child abuse- An evaluation of services to high-risk families. National Committee for Prevention of Child Abuse, Chicago, 1993.
- 5) Garbarino, J., Sherman, D. : High-Risk neighborhoods and high-risk families, The human ecology of child maltreatment. Child Development, 51, 188-198, 1980.
- 6) Fine, M. J. : Handbook on parent education. Academic Press, New York, 1980.
- 7) Webster-Stratton C. : From Parent Training to Community Building. Families in Society, 78(2), 156-171, 1997.
- 8) Daro, D., McCurdy, K. : Interventions to prevent child maltreatment. In Doll L, Bonzo S, Sleet D, Mercy J, Hass E. (Eds) : Handbook of Injury and Violence Prevention. 137-156, Springer, New York, 2007.
- 9) McCurdy, P. K., Jones, E. D. : Supporting Families, Lessons from the field. 2-18, Sage Publications, Thousand Oaks, 2000.
- 10) Burgess, R.L. : Child abuse, a social interactional analysis. In Lahey B.B., Kazdin A.E. (Eds) : Advances in Clinical Child Psychology. 142-172, Advances in clinical psychology, 2, New York, 1979.
- 11) Ibid. 8), 57-79.

表1 ペンシルベニア州で行われている Parent Education の事例

名 称	対象者	サービスと特徴	内 容
①オルタナティブ・ファミリー・リソース	低所得の家族と10代の親	訪問看護協会と協働で家庭訪問を行う	親子のブレイン・グループや親へのサポート・グループ、特に10代の親と若者が対象のグループ、虐待サヴァイヴァーを含んだ包括的サービスが提供されている。また、このサービスを受けている親たちは、無料の送迎サービスを受けることができる。
②APM (マルチャ・プエルトリコ人協会)	経済的な貧困地域に住む家族	集中的、家族単位のサービスを提供	このサービスは子どもの発達専門家や教師、ソーシャルワーカーなどの専門家からなる「家族保護チーム」によって提供される。ライフスキル・エデュケーション (LSE) や P.E.、親子のインタラクティブ・家事援助サービス (homemaker services) などが提供される。
③コングレンソ (ラテン連合会議)	ラテン系家族	P.E.* クラスを提供: このプログラムは、アドラーの心理学を基礎として、親の行動変容の方法として P.E. を行う	一定範囲における子育てのテーマを扱い、参加者の関心に沿った2つの P.E. クラスを置き、10週間のワークショップを行う。ペアレンティング・クラスの終了後、親たちは親子交流会に参加する。サービスの第二段階で、ワークショップ期間を12週間から15週間へと延長し、「キッドコネクション (Kid Connection)」という子どもの健康についてのサービスを提供する。ワークショップの期間を通じて、親たちには健康教育を行い、利用できる手段や制度についての資源を提供している。
④ファイラデルフィア犯罪防止協会	スラム地域	集中的かつ集団への介入に力点を置く: 各セッションは P.E. とそのサポートを提供	12週間の「モーニング・プログラム (Morning Program: MP)」は、独自に週4回1日4時間のプログラムを行う。また、「イブニング・プログラム (Evening Program: EP)」は MP と同様の内容で、週2回14週間のプログラムである。親がサービスを受けている間、子どもたちの世話や食事の提供、親子の交流時間などが設けられている。
⑤FSA (ピュック郡ファミリー・サーヴィス協会)	ピュック郡の二つの低所得者層の地域	3つのサービスの提供	①25週間のファミリー・エデュケーション (FLE)・シリーズは、子どものしつけ、お金の管理、子どもとの関係の作り方など、さまざまなテーマが取り上げられる。②自宅や FSA を中心としたカウンセリングや事例検討を行う。③ペアレント・サポートグループ (PSG) の提供。
⑥FSP (ファイラデルフィア・ファミリー・サーヴィス)	7つのスラム地域	P.E. クラスを提供	「ファミリークラブ (Family Clubs)」と呼ばれる6週間連続のペアレント・エデュケーションのワークショップを提供。ペアレンティングに加え、親子のポジティブ・モデルを使うペアレンティング・プレイが含まれている。財政的援助の第二段階では、対象者を両親から祖父母を含めるところまで拡大する。ワークショップが終了すると、参加者たちは継続的なサポート・グループに参加するか、限定的な場所でのカウンセリングを受けるかのどちらか、あるいは両方を含められる。
⑦FSS (ファミリー・サポート・サーヴィス)	低所得者層の地域で、健康問題を抱えた乳幼児のいる家族	センターで集中的なサービスを提供	「ファミリースクール (The Family School)」は、P.E. や親へのサポート、セラピーによる子どものケア、親と子どものプレイ・グループを含むカリキュラムを提供する。家族を介入させる方法のひとつとして家庭訪問を行っている。第二段階では、母親に対してプログラムに全出席する条件で、マンスリー・レスパイト・チャイルドケア・サービスという、1カ月間の子育てレスパイト・サービスを用意している。
⑧ファイラデルフィア・チャイルドサーヴィス協会	ハイリスクなスラム地域で活動。6歳以下の子どもを持つ親が対象	プログラムは、センターを中心とした親のグループ、気軽に入っておもちゃを借りることが出来るライブラリーなどのサービスと、家庭訪問を組み合わせて個人ベースとグループ・ベースの介入を行う	イリノイ州シカゴの「ベーターベン・プロジェクト」を真似て創られた家庭訪問モデルは、専門職助手の家族支援者を雇用している。隔週に家庭訪問を行い、親としての心配ごとや親子の接し方について相談に応じている。家族支援者と地域のボランティアが「ミネソタ初期学習計画モデル (the Minnesota Early Learning Design model)」を使い、親のグループを指導する。このモデルは子どもの成長と親子交流の強化を強調しながら、各週のグループ・ミーティングを、少なくとも2年間継続している。
⑨ユース・サーヴィス (YSI)	10代で妊娠して親になった若者が対象	家庭訪問およびユース・サーヴィス・センターにおける P.E. を提供	家庭訪問は母親が妊娠中から始められ、子どもが2歳になるまで継続している。訓練をつんだ専門助手が家庭訪問を行い、定期的に看護師と交代で訪問を行う。また週3回、センターでのサービスを提供している。第二段階におけるセンターの教育は「マザー・ベビー・ムーブメント・セラピー (Mother-Baby Movement Therapy)」というグループにまで拡大している。このグループは子どもの発達上、どのような方法が子どもと接する場合に有益であるかを、母親たちに教えることである。

\*P.E.=Parent Education

出典: K.McCurdy, E.D.Jones, "Supporting Families", 2000, pp8-13 より改編作成 (上野)